

## 図書室月報

2022年(令和4年)7月5日

第710号



〈講座「作家と作品」参加者の感想〉



## ミヒヤエル・エンデの物語

沼田 美和子



私は幼少期からピアノを習っており、基礎練習だけでも一時間ほどやっていた。ピアノは好きだったのでその練習の成果は幼いながらも感じていたが、同じ動きを繰り返す指練習の際は、楽譜は置いてあっても見ることはなく、集中力を保つのは難しかった。

そんな時ふと思いついて譜面台に本を置いた。邪道ではあるかもしれないが、練習が億劫ではなくなった。そして譜めくりならぬ、本めくりが頻繁では困るので、字がなるべく細かく、多く詰まっている方が都合が良かった。そんな理由から私は早いうちから読書が好きになった。やがて譜面台に置ける厚さではなくなくなった本を、本来の状態で見ようと思った。

譜面台に置けなくなり始めた本、それがミヒヤエル・エンデの本だった。そしてそれは手の中に収めなくては始まらない物語を感じさせた。厚みがあり、中の物語をずっしりと感じるその本は、静けさの中で開くのが合っていた。その本の中には風の音、人の足音、弓を引く音、スーパをすすする音、様々な音が自分の耳で聞いていることを感じさせるよ

うだった。子ども時代は長編の作品を読み終えることに達成感も感じるものだが、エンデの作品は読み進める楽しみを終わらせたくなくて、途中から読むペースを遅らせた。それほど夢中になった初めての本、それがエンデの本だった。

今も音楽を仕事にしている私にとって、ミヒヤエル・エンデは私の芸術観にも大きな影響を与えた。そんな私に公民館だよりの「ミヒヤエル・エンデの物語」が目にとまらないわけはなく、さらに驚いたのが堀内美江先生のお話を直接伺えるということだった。

私はエンデに関する堀内先生の記事を以前拝見しており、直接エンデと交流をお持ちだったことを知っていたので、先生のお話が国立で聞けるということで本当に興奮した状態で講座を受講させていただいた。

先生のお話はとても魅力的で、エンデがそこに現実において、エンデ本人と会話をしながらご紹介してくださっているようにも感じてとても引き込まれるものだった。

また、先生がエンデからプレゼントされた貴重な品などを惜しみなく手近に見せていただいた。想像の中

でしか出会えなかった世界観が一気に目の前に開けていくようだった。エンデの幼少期から晩年に関しても、詳しく教えていただいた。エンデの人間性、考えのルーツとなった出会い、出来事、それらを先生のお考えやエピソードと共に伺い、作品への想いもさらに深めることができた。

今回の先生のお話は、時間を忘れる楽しい学びの時間だった。そしてそれはエンデの本を読んでいる時の楽しみに似ていた。1回2時間、3回にわたる講座で先生からいただいた時間はたっぷりあったはずなのにあつという間に感じ、まだ続いてほしい、という思いはまさにエンデの本を読んでいる時の気持ちと同じだった。先生が聞かせてくださったのはまさに「ミヒヤエル・エンデの物語」だったと気がつき、講座が終わってから「あ！」と驚いて公民館だよりの中のタイトルをもう一度確かめるこの感じは、エンデの厚い本を読んでいる途中で驚いて本の表紙を確かめた、あの感じとそっくり。堀内先生の聞かせてくださったお話も、私の中で素敵な物語として残りそう。

ブッククラブから

井上荒野著 『あちらにいる鬼』

荒井寿恵

小説家の長内みはるは、故郷徳島での講演会に、同じ小説家の白木篤郎と同行する。みはるは故郷を出奔したときの相手、真二と暮らしていたが、白木に小説を添削してもらったため逢瀬を重ねていく。白木の妻は、夫の原稿の清書をし、家庭を守り支えている。みはると箕子の出会いは限られていたが、白木を「私たちの男」と認めあっていた。みはるが更年期にさしかかる頃に出家するのを白木と箕子は見守り、みはると箕子の気持ちは近づく。のちに白木は病没し、みはるの寺の墓に埋葬され、やがて箕子もそこに眠った。

ブッククラブでは過去に「不倫小説」の傑作と言われている、瀬戸内寂聴『夏の終り』を読んだ。妻子のある男の家を訪ねた女が、家の中に吊るされていたワンプリースを見て男の妻の人生に思いをはせる。これを踏まえた本作は、みはると箕子の二人の視点で交互に語られていく構成で、妻のワンプリースに箕子という肉体が与えられ、誰が読んでも美人で真面目な箕子のファンになってしまう。箕子も書く人だったと最後に明かされるが、聖書のマリアとマルタの譬えのように、みはるも箕子も、文学学校やその他の女性たちも、それぞれの場所でよく闘って生きたのかもしれない、と思

わされる。白木の役割は何だったのだろうか。

講師の山岸郁子先生は、本作は「本人監修のモデル小説」であり、文庫本の帯に「モデルに書かれた私が読み傑作だと、感動した名作!! 作者の父井上光晴と、私の不倫が始まった時、作者は五歳だった。瀬戸内寂聴」とあるように、パフォーマティブな寂聴と光晴、荒野の「多重の共犯関係」で「読者が誘導される」ようにできていると解説された。確かに、評伝(齋藤慎爾『寂聴伝 良夜玲瓏』白水社2008年)、映画(原一男『全身小説家』1994年)、エッセイ等に触れたことが、小説を読むときに読者のなかに侵入してくるのである。また、山岸郁子先生は、北海道で学生だったときに、旭川で井上光晴の文学伝習所に参加されたこと、井上光晴から「うちの奥さんと同じ名前だね」と言われたこと、「とてもとても魅力的な人だった」と述べられたのである。(これはブッククラブで過去から二番目に驚いた告白だった。)

『あちらにいる鬼』というタイトルについては、参加者から色々様々な解釈が出た。鬼ごっここの鬼か、あちらとは相手のことか、あの世のことか等々。作者にとつて、鬼籍に入ったあの人、チチ(井上家では、父とい

う意味でなく呼び名だったらしい) 井上光晴を恋う小説なのではないか。

女性たちを魅了した井上光晴がモデルとなった作中の白木は、女性たちの自由を求めて伸びる心をいたく刺激する人なのではないか。それは甘えと紙一重かもしれないが、「娘」でいさせてくれる「父」を求める気持ちと通じるものがあるように思う。(朝日文庫)



くにたちブッククラブ

— 感傷から遠く離れて —

水上勉 『雁の寺』 (新潮文庫)

講師 大木 志門  
(東海大学・日本近代文学)

とき 7月14日(木)  
夜7時半~9時半

ところ 公民館 地下ホール

申込先 公民館 ☎(572)5141

\*次回は9月8日(木)  
宇佐見りん『かか』  
(河出文庫)です。



新着図書から

〈歴史〉

東海道五十三次いまむかし歩き旅

高橋真名子(河出書房新社)

291

〈社会科学〉

白から黄色へ

ロテム・コーネル(明石書店)

326

死刑制度と刑罰理論

井田良(岩波書店)

316

世界はコロナとどう闘ったのか?

アダム・トゥーズ(東洋経済新報社)

333

ソ連兵へ差し出された娘たち

平井美帆(集英社)

334

〈必要〉から始める仕事おこし

日本労働者協同組合連合会編(岩波書店)

335

全国水平社1922-1942 朝治武(筑摩書房)

361

過労死・ハラスメントのない社会を

川人博(日本評論社)

366

見過ごされた貧困世帯の「ひきこもり」

原未来(大月書店)

367

DVにさらされる子どもたち

ランディ・バンクロフト(金剛出版)

367

ルポ座間9人殺害事件

渋井哲也(光文社)

368

「慰安婦」問題ってなんだろう?

梁澄子(平凡社)

369

子どもの貧困とライフチャンス

子どもの貧困アクショングループ編(かもがわ出版)

369

逢える日まで

河北新報社編集局(新曜社)

369

ケアとアートの教室

東京藝術大学 Diversity on the Arts

369

プロジェクト編(左右社)

376

日本の中の外国人学校

月刊イオ編集部(明石書店)

376

昆虫食スタディーズ

水野壮(化学同人)

383

世界の発酵食をフィールドワークする

横山智(農山漁村文化協会)

383

〈自然科学〉

絶滅危惧種はそこにいる

久保田潤一(KADOKAWA)

462

〈ヴィジュアルで見える〉歴史を進めた植物の姿

河野智謙(グラフィック社)

471

生殖技術と親になること

柘植あづみ(みすず書房)

495

もし親友が婦人科医で、何でも聞けるとしたら?

シーラ・デ・リス(サンマーク出版)

495

農村医療から世界を診る

色平哲郎(あけび書房)

498

〈工業〉

おいしい子育て

平野レミ(ポプラ社)

596

〈産業〉

リンゴの文化誌

マーシャ・ライス(原書房)

625

昭和・東京・食べある記

森まゆみ(朝日新聞出版)

673

〈芸術〉

仙居BEST100

仙居画(講談社)

721

経営者柳宗悦

長井誠(水声社)

750

〈言語〉

羊皮紙に眠る文字たち再入門

黒田龍之助(白水社)

889

〈文学〉

感染症としての文学と哲学

福嶋亮大(光文社)

902

おとぎ話の心理学 M.L.フォン・フランツ(創元社)

戦時下の大衆文化 劉建輝編(KADOKAWA)

910

奇跡

林真理子(講談社)

911

女性とジェンダーと短歌水原紫苑編(短歌研究社)

ブラックボックス 砂川文次(講談社)

913

その日まで

瀬戸内寂聴(講談社)

919

作家と珈琲

平凡社編集部編(平凡社)

919

アントワネットロベルト・ヴェラーヘン(集英社)

アウシュヴィッツを描いた少年

トーマス・ジューヴ(ハーパーコリンズ・ジャパン)

933

アフリカ文学講義 アラン・マバンク(みすず書房)

950

〈一節〉

『作家と珈琲』より

片岡義男 著

「タヒチ・パペーテの、

インスタント・コーヒー。」



観光旅行をまったく感じさせない、簡素にまとまった静かなホテルだった。朝食も夕食もおなじ食堂で食べた。宿泊の三日目に、朝食に降りて来た同行の写真家は、小さなカメラ・バッグを掲げてみせ、

「今日は町のなかをぶらぶら歩きましょう。荷物は少なうしました」と笑顔で言った。

雨になりそうな曇った朝だったが、時間がたつにつれて晴れてきた。陽ざしのなかを僕たちは歩き、スーパーマーケットのウィンドーに貼ってあるポスターを写真に撮ったりした。ヒナノというビールのラベルに描かれた女性を接写したから、場所はタヒチのパペーテだった。

\*

午前十時を過ぎて、おやつの時間になった。コーヒーを飲みたい、と写真家は言った。僕もコーヒーには賛成だった。町はずれを歩いて僕たちは、道ばた、という言い方のふさわしい場所に、食堂を見つけた。木造平屋建てのまんなかに入口のドアがあり、その左右は煉瓦敷きあるいは板張りだったか、もはや記憶にはないが明らかにデッキであり、丸いテーブルとその椅子がいくつも置いてあった。テーブルの上にはメニューがあった。

デッキに上がって椅子にすわった僕たちが話をしていたら、ポリネシア系の大きな体をした若い女性があらわれ、僕たちを不思議そうに見た。朝食には遅く、昼食にはまだ早い時間の、異国からの客だった。(平凡社)

図書室のしごと

『種から種へ命つながる』

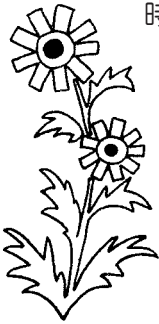
お野菜の一生』

お話し 鈴木純 (植物観察家)

私たちが普段なにげなく食べている野菜。その姿は、どれも命の途中のほんのひとコマです。植物観察家として活動する鈴木さんは、野菜を種から育て、「食べ物」でなく「植物」として観察し、約35種類の野菜の観察記録を写真とともに1冊の本にまとめました。その観察記録を通じて、種から種へ、人間や動物に食べられることなく命を全うしていく野菜の姿を知ることができます。

植物ガイドとして、主に町中を舞台にした植物観察会を多く開催してきた鈴木さんに、野菜観察の楽しさや野菜の一生についてお話いただきます。種から芽が出て、花が咲き、実へと姿を変え、その実の中にある種からまた次の一生が始まって命がつながる野菜の一生。日々目にしてるのに本当はよく知らない、身近な野菜の世界をのぞいてみませんか。〈鈴木さんの本〉表題作、『そんなふうには生きていたのね まちの植物のせかい』(ともに、雷鳥社)

とき 7月27日(水) 昼2時〜4時  
ところ 公民館 地下ホール  
定員 40名(申込先着順)  
申込 7月7日(木)朝9時〜  
公民館 ☎(572)5141



※大人向けの内容も含まれますが、ご興味のある小学生4年生以上のお子様もぜひご参加ください。

〈私の本棚から 第4回〉

ベア・ジョンソン 著

『ゼロ・ウェイスト・ホーム』



上原真弓

1人が1年間に出すごみの量は、いったいどれくらいだと思いますか? 国立市の「くたちごみの分け方・出し方カレンダー」令和4年度版によると、令和2年度の実績は1日あたり697.8グラムだそうです。それに365日かけると、25万4697グラム約254.7キログラムということになります。

本書に出てくるジョンソン一家は、家族4人、1年間で1リットルのガラスの瓶1本ほどしかゴミを出さない生活をしています。タイトルにある「ゼロ・ウェイスト」とはゴミをゼロにすることを目標に、できるだけ廃棄物を減らそうとする活動を示す言葉です。著者であるベア・ジョンソンさんはアメリカのカリフォルニア在住。アメリカ人の旦那さんと2人の男の子を持つフランス人女性で、ご自宅などの写真からは優雅で洗練された雰囲気を感じます。子育てをしながら綴ったブログがこの本の元になっています。

日本では到底できない!と思われるような項目もありますが、著者の挑戦の様子には勇気付けられます。また面白いのは、ゴミを減

らすために変えていったいろいろなものの中には、自作が大変すぎたり、また使い心地が悪くてやめたものがあることです。例えばシャンプーの代わりに重曹で髪を洗い酢でリンスすること。これは、ご主人にある夜に「きみの酢漬けのニシンみたいな匂いになんざりなんだ!」と言われたことでやめたそうです(笑)。自作はやめて、量り売りのシャンプーとリンスを購入するようになりました。

長期的にゼロ・ウェイストを継続するためのルールの一つには「コンポストをする」というものがあります。生ゴミや紙類はコンポストで劇的に減らすことができるそうです。本書には、訳者である服部雄一郎さんによる「各種コンポスト比較表」が掲載されています。国立市ではキエーロに取り組み、モニター講習会も頻繁に行われています。キエーロについても載っており、他のコンポストとの違いや置き場所や手間、費用などが一覧になっています。私も自宅のコンポストを検討する際にとっても参考になりました。

国立市は令和7年度1人1日あたり651.7グラムのゴミの量を目標としています。著者のちよっと笑ってしまうような挑戦や試行錯誤の中から生まれた気持ちの良い生活を、あなたも覗いてみませんか?そして一緒に一歩を踏み出してみましよう。

(アノニマ・スタジオ)